The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	有島武郎文学における下層の表象
Author(s)	申, 智淑
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41999
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 3 】

氏　　名	申（しん）　智（ち）　淑（すく）
博士の専攻分野の名称	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	第　14915　号
学位授与年月日	平成11年9月9日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科　国文学専攻
学 位 論 文 名	**有島武郎文学における下層の表象**
論 文 審 査 委 員	（主査） 助教授　出原　隆俊 （副査） 教　授　伊井　春樹　　教　授　玉井　　暲

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、序章、第一章 「かんかん虫」―下層労働者の描かれ方を中心に―、第二章 「お末の死」―お末とお末の死の原因を中心に―、第三章 「カインの末裔」―仁右衛門の読み直しのために―、第四章 「生れ出づる悩み」―同感する想像力の行方―、終章からなる。四つの小説の作品論を通して、有島武郎が下層に生きる人々を小説の中でどのように描いているのかを集中的に検討したものである。

第一章では、主人公格の人物が、知識人的存在であるという従来の見解に対して、読書能力を身につける過程を検討することによって、その是正を試みた。また、労働者たちの個々の有り様を細かく検討することによって、集団的に把握するのではなく、個性の違いを明確にし、目指すものの差異を明らかにすることに重点を置いて論じている。

第二章では、お末が四人の家族の死にたいしてどのような反応を示したかを検討することによって、お末の変貌する様子を追った。そこにお末の自己愛の「命の力」の存在を読み取り、その裏には作者がニーチェの「この人を見よ」の影響を受けていることがあると指摘する。お末の内面の精緻な検討はこれまでになされてこなかった。

第三章では、仁右衛門の「おびえ」と「誇り」に注目することによって、野蛮な存在としての理解で済まされていた主人公の人間像の把握に新たな視点を導入した。それにあたっては、流浪する下層労働者を取り込んでいる同時代の小説を広い範囲にわたって検討している。仁右衛門は自己の「誇り」を捨てなかったと結論づける。

第四章では、作者が「同感という創作方法」に相応しい素材にであったと指摘し、「芸術を神聖視し、労働を尊重したがる」作者の思想を「接ぎ木」したとする。武者小路実篤や長与善郎の作品と対比しながら、労働と芸術の問題や天才主義自体は「生れ出づる悩み」独自の問題意識ではないことも指摘する。

以上の検討を通して、「下層の人を描いた」有島の作品は、「リアリズムの姿勢に基づく「同感」する想像力とヒューマニズムの姿勢による有島自身の実感や思想の投影、両方によって紡ぎだされている」と結論づける。

論文審査の結果の要旨

この論文は、まず、「下層」という視点に集中して有島の作品世界の検討を深化させようとした点で、新しい足場を構築したといえよう。また、従来のそれぞれの作品論に対して、取り分けて同時代の他の作家達の作品を、「早稲田文学」、「三田文学」、「スバル」、「帝国文学」、「新小説」、「白樺」、「新思潮」などの雑誌や「朝日新聞」などにあたって幅広く視野に入れることによって、見落とされていた部分を指摘し、新たな作品論の可能性を広げた点でも、高く評価されてよい。しかし、一方で、「下層」という点で全体の論を統合しようとするなら、たとえば、「カインの末裔」における仁右衛門の妻の姿をどのように把握するのかというような検討が不足しているといわざるをえない。各章における作品論が、新たな問題提起を果たしているとしても、論文そのものの表題からいえば、よりいっそうの検討が要請される部分が少なくない。また、「下層の表象」という論文名が筆者の問題意識に最適のものであるのか、という疑問もぬぐえないところがある。また、「生れ出づる悩み」において、作者有島と語り手の「私」を無前提で同一のものとして扱っていいのかという批判も完全には回避できないだろう。社会科学的用語の使い方に不正確な部分があることも否定できないところである。このように、今後の研究課題として残されている部分は少なくない。

しかし、同時代の作品を博捜した努力とそれによって従来の解釈を修正していくという方法の確立は、今後の研究に大いなる刺激を与えることも間違いないところであろう。

よって、本論文は博士（文学）の学位に相応しいものと認定する。